

と二人の坊主は飯を取寄せ、彌次郎兵衛北八と一座になつて飯盛を始めました。そして二人の坊主は井で二三杯宛飲んで、

「これ女中、何程ぢや？」

「御一緒に御勘定致しませうか。」

「そぢやわいな。」

「それでは五百七十文頂きますわいな。」

「安いもんぢや、二つ割りに致そかいな」

と半分拂いましたので、彌次郎兵衛は飛上り、

「そりや酷い、俺も北八も二杯食べたばかり、後の飯はお前方しこ

たま食べて、二つ割りとは不承知々々。」

「何ぢやいな。一座で飯盛さんしたもの、よう食へんは、お前方の

勝手ぢやないか」

と云つて二人の坊主は行つて仕舞ひました。彌次郎兵衛と北八は

顔を見合せ、

「何のこつた。碌な事はない。もう京は懲々だ。これから大阪へ行から。」

と勘定を済ませ、その日の夕方淀の大橋から下船に乗つて大阪へ無事に着いて、長町の分銅河内屋と云ふ宿屋を尋ねて参りました。



宿屋の亭主は二人を隣の六疊へ案内しましたが。その座敷には先客が一人居る様子。亭主は障子を開け、

「何卒今夜は御一緒に願ひます」

「さあ、此方へわせしやつしやい。わごり達や、何處から來よりました。」

「江戸から參りましたが、お前さんは？」

と北八が申しますと、

「私は丹波の笹山。今度高野山へ行きますよ。」

やがて飯も済んで寝る前になり、丹波の客は柳行李から小さな曲

者を取り出し、

「こりや道修町のお店で貰うて來よつた砂糖漬ぢや。茶の子に一つ遣らつしやれ。」

と砂糖漬を二人に分けて呉れました。

「これは御馳走様、彌次さんさあ頂かう。」

とその砂糖漬で茶を飲んで、間もなく臥床に入りましたが、夜半頃彌次郎兵衛は、何かごそく云はせて居りますから、北八は目を覺まして、

「彌次さんかね。」



「俺だ〜。」

「お前こそ〜何をするんだ？」

「何故だか少しも寝入られないから。」

「何だ。持つてるのは、何なものを、何處から引寄せたのだ。」

「大きな聲を出すな。これは先刻の砂糖漬だ。足でこつそり掻寄せたのだ。」

北八につと笑ひ、

「抜目がないな。どれお見せ。」

「これだ〜。」

と彌次郎兵衛は夜着の中から、小さな曲者を出して見せました。

丹波の客はすや〜と寝入つて少しも氣が付ません。

「ある處を能く知つて居たな。まるで泥棒のやうな人だ。」

「柳行李の傍にあつたのを、ちやんと睨んで置いたのさ。石川五右衛門其處退けだらう。」

「俺にも一つ寄越しなさい。」

「待て〜。俺が先づ毒見をしてからだ。」

と彌次郎兵衛は曲者の中から、一つ撥んで口へ入れ、がり〜と嚙んで、



「こりや固い雙挺な砂糖漬ぢや。北八手を出しな。お前にも一つ漬らう。」

「どれお呉れ。」

北八手を出すと、彌次郎兵衛一つ北八の手に載せて遣りました。

「旨さうだな。」

と云ひながら、口へ入れ、

「何だ。大層灰だらけなものだ。こりや砂糖漬ぢやなさうだせ。」

何だか可笑しな匂ひがする。」

と云ふ内、丹波の客は目を覺まし此の様子を見て、驚仰天

「ヤア〜〜〜。わり様達。こりや何うちや？」

彌次郎兵衛北八大敗北。

「御免々々！」

「御免ぢやない。私が女房を何んせ食ひよる？」

「ナニ？ お前の女房、これが又お前の女房とは何の事だ？」  
丹波の客は涙聲、

「何の事ぢやとは情ないわいの。そりや私が女房のぢやわいな。能うその入物の蓋を見やしやれ。」

云はれて彌次郎兵衛飛起き、行燈の前に持つて行つて蓋の書付を



讀みますと、秋月妙光信女と書いてありましたので二度喫驚、

「それなら、これはお前の内儀様の骨！砂糖漬ではなかつたのか。」  
と開いた口が塞がらず。北八も飛起きて、

「ナニ骨だ。こりや飛んでもない物を嚙つた。道理で胸がむかつく  
エ、大變ぢや〜。」

「わり様達の胸の悪うなつたより、私の胸がつツ張つたわい。こり  
や私どもの村の法則で、女房の骨を高野山へ納めに行きよるので  
御座るわいの。でも能うまあ大切な佛を食ひよつた。わり様達は  
眞人間ぢやありやしよまい。」

と丹波の客は泣き出しました。彌次郎兵衛は可笑しくもあり、氣  
毒でもあり、

「柳行李から轉げ出たの知らずに居たはお前さんの無調法。それ  
を砂糖漬と思つて嚙つたのは此方の龜相。五分々々だからまあ勘  
忍しなさい。」

「イヤ成らん〜。元の通りに償うて返しやれ〜。」

と丹波の客は涙交りに掻口説きました。それを北八が仲に入つて  
色々と宥めすかし、やつとの事で勘辨させる事となりました。彌次  
郎兵衛は頭を掻きながら、



「人の骨食ふもことわり若い時、親の腰をも噛りたる身は。」

と云ふ狂歌を詠み、丹波の客も心解けて、翌朝一番鶏の鳴く頃宿屋を立つて高野山へお詣りしました。

彌次郎兵衛と北八は、番頭に連れられて、方々の見物に出掛けました。

### 「十八」百兩の前祝

彌次郎兵衛北八は、番頭に連れられて、先づ天満宮に参詣しましたが、天神橋の真中で、彌次郎兵衛の履いて居た雪駄の鼻緒が切れ

き裂いた、

ところに向ふから、

「デイ〜。デイ〜！」

と云つて遣つて来たのは紙屑買でありました。彌次郎兵衛は、デイ〜と觸れて歩くのを見まして、雪駄直しと思ひ込み、

「オイ〜。この雪駄を頼むせ。」

と申しますと、紙屑買は彌次郎兵衛が出した片方の雪駄を見まして、

「片方ではどもならんわい。其方の方も鼻緒が切れさうぢや一緒に



さんせ。」

「ちや一緒にして幾何だ？」

紙屑買は買取る積りで、

「安いが良いかな？」

「何でも安いに限る。高いのは御免だ。」

「四十八文でどうちやいな。」

「四十八文は高過ぎる。二十四文にしな。」

「二十四文で好いかいな。」

「好いとも〜。」

「ちや二十四文で買ひましょかいな。」

と二十四文錢を渡して、雪駄の紙屑籠の中へ入れ、持つて行かうとしましたので、彌次郎兵衛は合點が行かず、

「何うする〜。俺に錢を寄越して、その雪駄は何處へ持つて行くんだ？」

と申しますと、紙屑買は妙な顔をして、

「何處へ持つて行かうと、買ったのちやもの。」

「馬鹿を云へ。鼻緒が切れたから直して呉れと云ふのだい。」

「俺は雪駄直しぢやないわいな。コレ、紙屑買ぢやがな。」



成程能く見ると紙屑買。彌次郎兵衛はハツと思ひましたが、

「そんなら、デイ〜と何故云つて歩く。」

と力み出しました。番頭は笑ひながら、

「屑屋さん此方が悪い。江戸では履物直しがデイ〜と云つて歩く

から、お前を履物直しと間違へたのぢやさかい。許しなされ〜」

とやつと雪駄を取戻し、彌次郎兵衛には草履を買つて履かせて、

天神橋を渡りますと、何だか紙に包んだものが落ちて居たのを、彌

次郎兵衛早速拾つて見ますと、中には八十八番と書いた札が入つて

居りました。それは其頃流行た座摩の宮の富札と云つて、今の勸業

債券のやうなものです。

「これは何だらう。八十八番と書いてある。」

「どれ。これは富の札ぢや。座摩の宮の富の札ぢや。今日突く日ぢ

やわいな。」

「どうせ捨てた位なものに當る氣遣ひもあるまいさ。」

と笑ひながら彌次郎兵衛は捨て、了ひました。すると北八は何と

思つたか、それを拾つて懐へ入れました。やがて三人は富札を突く

日なら、嘘ぞ賑ふ事だらうと、座摩の宮へ参詣して見ますと、富札

は最う突いて了つた跡と見え、富札の番付が神前の正面に貼出して



あります。行つて見ると一の富八十八番と書いてありました。彌次郎兵衛は地黙團を踏み、

「こら何うちや。八十八番の札は、先刻俺が拾つて捨てた札ぢやないか。あつ残念な事をした、捨てずに置けば百兩立派に取れる筈だつたのに、あゝ口惜しい。俺はもう到底運の開ける見込みはない。北八一層もう坊主にでもなりたい。」

北八は莞爾々々顔で、

「俺が百兩取つたら、二兩三兩は貸して遣らう。」

「何だと？ お前あの札を拾つて来たのか？」

「如才があらうか。百兩の福の神を捨てゝは罰が當らあ。これ御覽

！

と懐から八十八番の札を出して見せますと、彌次郎兵衛は胸撫下し、

「出来したく。ドレ此方へ寄越しなさい。」

「寄越すものか。俺が拾つて来た札ぢやないか。俺に授かつた運を誰がお前に渡すものか。馬鹿々々しい。」

「元は俺の物だ。俺が拾つて捨てたからお前の手にも入つたのだ。」

「何と云つても渡さんく。」



と喧嘩を始めようとしたから、番頭が仲に入つて、

「もう好い〜。何ぢやらうと俺が仲裁ぢや。半分宛分ける事にしなさろ。そして俺にもちつとはお呉れぢやらうな。」

「承知々々、此處で云ひ合つても仕方がない。早く金を受取らう。」  
と世話人の居る處へ行つて見ますと、金は明日渡すと云ふ事が貼出してありました。彌次郎兵衛北八は大喜びで、其日は茶屋に寄り前祝ひの酒宴をして宿屋に歸りました。

### 「六九」損料の大盡

茶屋で前祝をした三人は、歸途に大丸呉服店の前に通り掛りました。氣の早い彌次郎兵衛は立停つて、呉服店の中をちろ〜眺めて居りましたが、

「オイ北八。着物を眺へて置いては何うだ？」

「好からうな。」

「百兩の旦那が布子一枚づつでは外聞が悪いせ。」

「大きに其通りだ。」

と相談して、今にも立寄らうと致しますから、お供の番頭は引止めて、



「まあ〜。明日の事になされませいな。何も今日に限つた事ではないさかい。」

「そんなら明日の事にしよう。何うも江戸子は氣が早いからな。」

「彌次さん。一體お前は何を拵へたいと思ふ。」

「お前先に云つて見い。」

北八は歩き〜、

「左様さな。結城のすツと粹な縞で三枚ばかり、羽織は龍紋の芥子霞などが金持らしく見えるだらう。」

彌次郎兵衛は首を振つて、

「それでは店者めくから不可ない。袖なら縞縮緬揃へに黒羽織、お太刀一本ちよいとさめの判官盛久、何うだ妙だらう。」

「時にそれから、貴殿方に大阪の芝居をお目に掛けたいなあ。」

番頭に斯う云はれて、彌次郎兵衛は北八を振向き、

「芝居も好いが、布子一枚では歩きたくないなあ。何うだ北八。」

北八は頷いて、

「さうとも〜。幟の染返しを來て居ちや、富に當つた旦那とは見えないて、あは〜、〜。」

と申しますと、番頭は二人に向つて、



「今から大丸呉服店に逃へても、今夜の間には逢ひませんさかい。左様なら斯うしては何うぢやいな。明日は立派に百兩の大金お取りなさるのなもの、何と損料の着物借りて上げようわいな。それ着て芝居見にお出でなされ。」

彌次郎兵衛は手を打つて、

「こりや面白い。巧い事を考へたものだ。」

「如何様な。そんなら直ぐに歸つてその算段をして貰はうぢやないか。」

「畏りました。いつまに算段して上げようわいな。」

と三人は大急ぎで一先づ分銅河内屋に歸りました。女中は出迎へ「お早う御座りました。もしな。お湯は何うで御座いますかいな。それとも御膳に致しまよしかいな？」

彌次郎兵衛は、笑ひながら首を振りく、

「飯どころか、何だかそはくしてな。だが湯にはちよいと入りた  
いもんだ。」

北八は横から口を出し、

「彌次さん、遅くなるせく。」

「なんの、顔ばかり一寸洗つて來るのさ。」



と湯殿へ行つた跡に、番頭は損料着物を風呂敷に包んで持つて来ました。待構へて居た北八は、早速ひねくり廻し、

「碌なものななさうだな。」

「これがいづち好いのぢやわいな。お前さんにはこの黒袖が似合ふぢやろぞい。」

「馬鹿に大きい袖だな。それに丈はてんつるてんだ。これを着込んだら百兩の旦那どころか、無鹽の奴胤に見えるだらう。其方の縞はそりや何だ？」

「これはふとり縞ぢやさうな。」

「イヤ、これは何だ。この小紋は好からう。何だ女物か。女物を又何故持つて来たんだ？」

「男物と思うて持つて来たら、女物ぢやつたさかい。は、は、は。」

「好しく。小袖一枚ぢや見つともない。女小袖を下に着て、上はふとり縞と云ふ寸法にしよう。」

と北八は二枚重ねて帯を締めました。其處に彌次郎兵衛湯殿から歸つて來まして、

「北八奴が着たは。男ぶりが好いから、何處へ出しても損料借りをして居るとは、矢張り見える。」



北八は急込み、

「洒落れすと早くお前も支度をなさい。」

「俺はこの黒い奴が。旦那と見えるやうにお太刀一本差して行かう」  
北八噴飯し、

「これ、お前裸に脇差を差して何うするく。」

「オット、、、。」

と彌次郎兵衛も笑ひながら、やつと支度をして、

「さあ出掛けよう。」

と宿屋を出て、順慶町まで参りますと、

「御評判のちくら鯨ぢや！」

「彌次さん、あの鯨は京で食つたが好かつたせ。一つ何うだ？」

「好しく。鯨屋幾何だ。」

「四文に六文。」

「三十二文紙に包んで呉れ」

鯨賣は竹の皮に鯨を包んで彌次郎兵衛に渡しました。彌次郎兵衛は道々出して一つづつ食べながら、

「此奴は格別結構々々。」

「彌次さん。俺にも呉んな。自分ばかりで食べて！」



「後で竹の皮を遣るから待つて居な。」

「何を？」

と北八は取りに掛りましたので、彌次郎兵衛遣るまいとしますと、下から犬が飛付いて竹の皮包を引つたくりました。

「いま〜しい。犬にふんだくられて了つた。」

「へん、態を見ろい。」

と北八は手を叩いて笑ひました。

### 「三十」二人の泣面

彌次郎兵衛と北八は、翌朝雀よりも早く目が覺めて飛起きました。今日は座摩の宮で百兩の金を受取る日ですから、もう氣がそはくして落付きません。

やがて二人は番頭を連れて、座摩の宮へ参りました。彌次郎兵衛は北八に、

「お前先きに入んな。もうちゃん和金を渡す用意が出来てるらしいせ。」

「何だか極りが悪いな。」

と北八は云ひながら社務所に入つて、



「俺等は昨日の一の富に當りました。どうぞ金をお渡し下さりませ」と申しますと、羽織袴の人が出て來まして、

「さあ、此方へお通りなされ。」

と三人を奥の大廣間に連れて行つて、茶、煙草盆を運んだり、酒肴を出したり大騒ぎ、

「先づ御酒一献召上りませ。只今早速金はお渡し申しまする。」  
彌次郎兵衛は頭を下げ、

「これは御叮嚀に、どうも早や。滅相な。」

と酒を二三杯御馳走になつて居ます内に、神官が先きに立ち、講

中の人二三人附添ひ、三寶に百兩積んで持つて來て、三人の前に据ゑました。

「拙者は神官の名代で御座る。今回は誠に以つてお目出度い事で御座る。」

「はい。お蔭様をもちまして。はい。」

講中の一人進み出まして、

「時に御三方に御願が御座います。元來御覽の通り、當社大破損に就きまして、再建の爲め催しました富で御座れば、お當りなされたお方へは、何方へも御願ひ申して十兩の寄進に付いて貰ひたい



ので御座るが、貴殿方に於ては如何で御座らうか。」  
彌次郎兵衛領き、

「宜う御座いますとも。」

「外に金五兩、これは世話役ども一同へ御祝儀としてお貰ひ申した  
いので御座るが、御儀は？」

「はいく。宜う御座いますとも。」

「外に金五兩、これは後札をお買ひ成されては下さいませんか。」

「はいく。宜う御座いますとも。」

「左様なれば、百兩の内から二十兩引きまして、殘金八十兩確にお

渡し申しませう。札は御持參で御座いませうな。」

北八懐から八十八番の當札を勿體らしく出しました、

「札はこれに御座います。はい。」

と世話人に札を渡しました。世話人はその札を一目見て顔色を替  
へ、

「こりや違ひ申したわいな。」

二人はギョツとして、

「ナニ違つたは？ 何處が何う違ひました。」

「十二支が違ひました。當社の札には皆な十二支が付いて居ります



わいな。一の富は子の八十八番、此方さんの札は亥の八十八番ぢやいな。これはともならん。」

「え、そんなら三文にもなりませんか。彌次さん、こりや大變な事になつたな。」

北八はブル／＼戦へながら申しますと、彌次郎兵衛はまるで死人のやうになつて、

「根つから、薩張り力が抜けて、俺もう何うも、坊主にでも、ならなくちや。」

「泣きなさんな。彌次さん見つともない、江戸子ぢやないか。」

世話人は舌打ちしながら、

「こりや、此方さん達は、宜う札を改めて御座んしたが好いわいの散三手敷を掛けて豪い阿房な人達ぢや。さあ／＼早く退いて貰ひませうかいな。」

と追立てられて、彌次郎兵衛は涙聲

「あ、これ北八。俺の後を抱へて呉れ。」

北八は顔を擧め、

「何だ意氣地のない、お前は腰が抜けたのか？」

「ハッと思つたせゐかして、何うも早や腰が伸ばされぬ。アイタ、



「……」

「厄介な人だ。さあ立ちなさい。」

「そんなに、引張るなく。」

彌次郎兵衛は四這ひになつて玄關に這出で、やつとの事で座摩の宮を逃出して顔見合せて、

「オイ北八、何うするく？」

「何うするも斯うするも、頓斗好い智恵が出ないとも。」

「もう世の中が厭になつて了つたな。俺何だ首が縊りたくなつた。」

「飛んでもない。此上首でも縊られちや遣切れないだが。彌次さん、

當札は亥の八十八番だと云つたな。」

「左様ともく。亥の八十八番ぢや。」

「落ちては居まいなあ、此邊に？」

「馬鹿を云へ。貴様昨日俺が捨てた時拾はずに置けば好かつたのに、飛んでもない種々な變挺な目に逢はせる奴だ。」

「彌次さん、虫が好いな。まあ仕方はないさ。諦めて了はう。」

「金に縁がないからの事さ。」

番頭も氣毒になつて、

「飛んだ事であつたさかい。併し何も因縁づくちやろ。思切つて了



つたが好いわいな。」

「損料借なんかせずとも好かつたに、あゝあゝ。」

「もう好いわいな。彌次さん。宿へ行つて酒でも飲まう。江戸子だ。」

へこ垂れなさんな。」

と北八は二人の先きになつて分銅河内屋に歸り、縁起直しの酒など飲んで、元來がひようきん者揃ひの事ですから、厭だくと云ふ口の下から洒落れ通しで、方々見物して歩く内に、持つて居た旅路はすつかり遣つて了つたのも屁とも思はず、シヤアくしながら暫く分銅河内屋に滞留して居りましたが、河内屋の主人は、つくづく

二人の氣性に感心しまして、新しい着物を拵へ、路金も十分持たせて、間もなく二人を大阪から立たせましたとさ。

## お伽五十三次 終



大正二年九月廿八日印刷  
大正二年十月一日發行

(お伽五十三次奥附)

著者

原田雲山

發行者

東京市日本橋區馬喰町四丁目一六  
久保田長吉

印刷者

東京市淺草區左衛門町一番地  
岩見米三郎

不許  
複製

發行所

東京日本橋區馬喰町四ノ六  
電話浪花三八一九番  
振替東京一七一九九番

久保田書店



274  
387



終

